

深い関心を持ち、昭和39年秋の第31回近畿産科婦人科学会に於いて民間薬の連用と性器出血との関係について注意を喚起したが、その後に於いてもこの種症例に遭遇しているので、これらの症例をあわせて報告する。

現在迄に経験せる症例18例にて総て性器出血を主訴とし来院した。その原因となつたと思われる常用薬、服用期間、子宮内膜、尿中ホルモン排泄値等について検討した。服用期間は短かきは1カ月、長きは5年に及ぶ。尿中ホルモン排泄値から見ればこの種薬剤常用者に於いて総エストロゲン値が閉経期婦人のそれに比し明らかに高値を示した。内膜像は増殖像を示すものもあり萎縮像を示すものもあつて必ずしも一定の傾向を認め難いが全体を通じ内膜刺戟の所見を肯定してよいと考える。

追加 (京都府医大) 徳田 源市

閉経期1～2年後の婦人にビタミンB剤の大量投与がなされた時、少量の不正出血が起る事を経験している。これの機序は卵巣の activation によるのではないかと考えている。

20. 更年期障害症における尿中 **adrenaline** 及び **noradrenaline** の消長について

(鹿児島大) 竹田 芽生

Catecholamine (CA) と自律神経機能との深い関連性については、今日否定出来ない事実とされているので、CAとして尿中の **adrenaline** (A) および **noradrenaline** (NA) を Euler (1955および1959) の変法で正常婦人、健常更年期婦人、更年期障害症婦人および去勢婦人について観察したところ、性周期においては卵胞期に比較して黄体期に高値が認められた。

更年期障害症婦人では健常更年期婦人に比べ、血管運動神経障害を主とする群では、AおよびNAともにやや低値の傾向を示した。性器出血を主とする群でも、AおよびNAと低値を示したが、この群ではAが低値を示すものが多く認められた。精神神経障害を主とする群では、AおよびNAともに分散が大きく、一定の傾向が判然としなかつたが、ややNAが高値を示すものが多かつた。去勢婦人では一般に低値を示した。

治療後は症状の改善とともに、次第に正常値に復帰するような傾向を示した。

21. 卵巣における各種酵素の組織化学的研究

(和歌山医大) 久保健太郎

田仲 紀陽、楠林 哲次、塩崎 嘉輔

今回は動物、人の卵巣における各種酵素活性を性周期

的に検討した。 3β hydroxy steroid dehydrogenase (3β D), glucose 6 phosphate dehydrogenase (G6PD), succinate dehydrogenase (SD), lactate dehydrogenase (LD), Aldolase (AL), isocitrate dehydrogenase (ISD), DPN diaphorase について検討した。最も性周期によく反応する組織は、家兎では間質腺ラットでは黄体で、人黄体もかなり強い変化を呈する。家兎間質腺では 3β d, G6PD ISD, SD, AL, が同様の傾向を示し、proesterus で最も強く、次に esterus, diesterus の順に活性を示す。ラット黄体においても 3β D, G6PD, ISD, SD, AL, は同様の傾向を示し、Proesterus が強く esterus, diesterus の活性が弱い。人黄体では分泌期初期のものが最も強い活性を示す。卵胞では、動物、人共に theca interna における G6PD, TPN-dependent ISD 活性が特に強く出る。家兎では large follicle の theca interna は small follicle の theca interna より活性が強い。granulosa ではこれら両卵胞において、あまり差は認められないが卵胞内出血直後より急激に活性を増す。

22. 婦人科領域における尿中 **5 HIAA** の観察

(鹿児島大) 佃 篤彦

セロトニンはその生理的ならびに薬理的作用から、情動や自律神経機能との関係が注目されているので、婦人科領域においてセロトニン代謝物尿中 **5 hydroxy indole acetic acid** (**5 HIAA**) を Pierce の方法で測定したところ次の結果を得た。

1. 健常婦人各年代の **5 H I A A** は思春期より増大し、成熟期と更年期では著差なく、老年期ではやや減少する傾向が認められた。

2. 性周期における **5 H I A A** は月経開始前からその初期にかけて増加の傾向を示すが、排卵期にも高値を示すものがあつた。

3. 更年期障害症では血管運動神経障害を主とする群および精神神経障害を主とする群で高値を示すものが多く、とくに後者群ではその分散が大きく、症状の強いものほど排泄値の高いものが多かつた。性腺機能失調にもとずくと思われる性器出血を主とする群では正常範囲の下縁に位し、一般に低値を示した。

4. 所謂更年期障害の治療例では正常値復帰への傾向を示すものが多かつた。

5. 子宮筋腫、卵巣嚢腫および子宮癌患者においては一定の傾向を認めがたかつたが、手術患者では術前一般に高値を示す傾向が認められた。